三井三池炭鉱の産業遺産における記憶の継承に関する研究

- 宮原坑、万田坑の跡地周辺を事例として -

松永　悠希

1. 研究の概要

1-1. 日本における産業遺産の位置づけ

産業遺産には、ある時代におけるその地域の歴史を後世に残す役割がある。日本では、経済産業省により産業近代化の過程を物語る建築物や機械、文書が継承されている。しかし、産業遺産に登録されるものは建造物を対象としている場合がほとんどであり、それらはある種のネームバリューのような付加価値によって建造物の名前だけが独り歩きし、その時代での地域の当時の記憶などの非物的な情報は薄れてしまっている[1)]という課題がある。こうした問題に対して、世代を越えた記憶の継承の要因を把握することで、継承が容易になり、その結果として産業遺産の保全活動を促進するきっかけ[2)3)]となると考える。

1-2. 研究の目的と方法

本研究では、福岡県大牟田市・熊本県荒尾市に展開する三井三池炭鉱（以下、三池炭鉱）を対象とする。炭鉱の出炭量が最大となった1970年付近を三池炭鉱の最盛期と捉え、その年代と現在の炭鉱に関する記憶の内容について調査を行う。その上で記憶の継承[(1)]に関わる要因や、それらの特徴や傾向を明らかにする事を目的とする。

本研究の構成として、2章では大牟田・荒尾地域の歴史を整理する。3章では、炭鉱最盛期に炭鉱に携わった人々へのヒアリング調査をもとに炭鉱周辺の復元地図を作製し、歴史的資産[(2)]を整理する。4章では、復元地図を用いたヒアリング調査より、現在の記憶の継承状況を把握し、比較や分析を行う。そして5章で研究対象地の現状・課題を整理する。

1-3. 本研究に関する既往研究

研究対象地に関する研究として、西牟田(2010)[4)]が三池炭鉱における社宅生活での暮らし方とその評価をまとめている。また、森嶋(2011)[5)]が近代化産業遺産保存活用の動きが広まる過程を整理している。記憶の継承に関する研究として、清水ら(2018)[6)]が聞き取りと関連資料から継承すべき地域の記憶の資料をまとめ、記憶の継承に活用できる可能性がある事物について分析している。

本研究は記憶の継承という観点で炭鉱最盛期に携わった人々の現在の記憶と彼らの子世代・孫世代に継承された記憶を比較する。そして炭鉱最盛期と現在における歴史的資産の記憶の継承状況の違いから、その性質や傾向について考察する。以上の点において本研究は新規性があるといえる。

2. 三池炭鉱における歴史的経緯

2-1. 研究対象地について

研究対象地は三池炭鉱の主要施設であった宮原坑と万田坑の跡地周辺である（図1）。その跡地は1998年に国指定重要文化財[7)]に指定され、現存している施設の一部が、現在観光施設として運営されている。宮原坑では、坑口付近にある三池集治監に収監された囚人を採炭労働に使役させる囚人労働が行われていた。また、万田坑は坑内の採炭から選炭・運搬までの一連の流れがわかる設備等が良好な状態で現存している。

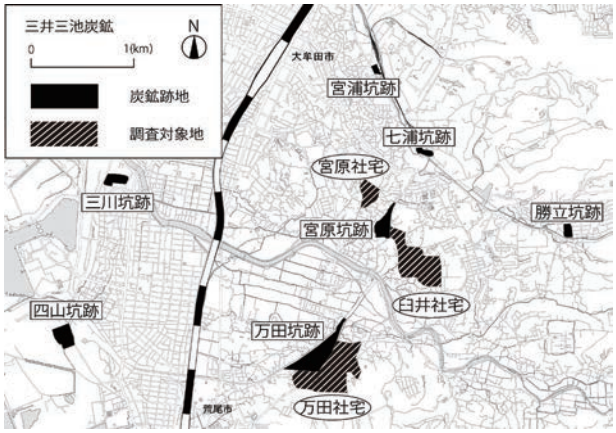

図1　三池炭鉱の主要施設（基盤地図情報、参考文献[8)]に基き筆者作成）

2-2. 三池炭鉱および周辺地域の歴史

本節では三池炭鉱および周辺地域の発展に関する歴史を整理する（表1）。

幕末以降、三池炭鉱をはじめとする主要鉱山は富国強兵・殖産産業を推し進める明治政府により官営されていた。しかし、後に三井組へ払い下げられ、1889年に三井組による経営が始まると、立て続けに坑口の開削が進み、1940年までに5箇所の炭坑で出炭が開始された。

出炭量の増加に伴い運搬施設の整備も進められ、1894 年に三池専用鉄道は国鉄と接続し、1908 年の三池港の完成に合わせて専用鉄道網が完成した。さらに、石炭から様々な副産物を精製する工場が宮浦坑周辺を中心に建設され、三池炭鉱地帯に石炭を中心としたコンビナートが形成された。

しかし、1955 年以降高度経済成長期を迎えると、国内のエネルギー政策の転換により石油がエネルギーの主力となったため、出炭量は減少していった。1997 年に三池炭鉱は閉山し、その後国指定重要文化財や国指定史跡[9]となっている。

表1　三井三池炭鉱の歴史(参考文献10を参照)

西暦	三井三池炭鉱の動き
1857	大浦坑開坑
1877	大浦坑-大牟田港間に馬車鉄道敷設
1883	七浦坑操業開始（～1931年閉坑）
	三池集治監開庁、後に三池監獄、三池刑務所と改称（～1931年閉庁）
1888	宮浦坑操業開始（～1968年閉坑）
1889	政府から三井組へ三池炭鉱の経営権一切の引渡完了
1895	勝立坑操業開始（～1928年閉坑）
1898	宮原坑操業開始（～1931年閉坑）
1902	万田坑操業開始（～1951年閉坑）
1908	三池港竣工、開港場に指定
1923	四山坑操業開始（～1965年閉坑）
1930	女子坑内夫の入坑禁止、囚人の採炭作業や馬匹使役を廃止
1935	東洋高圧(現三井化学)大牟田工場竣工、硫安製造開始
1940	三川坑操業開始（～1997年閉坑）
1944	戦前における出炭量最高を記録（403万トン）
1959	三井三池製作所が三井鉱山から独立
1960	三池争議（戦後最大の労働争議）
1963	三川鉱炭じん爆発事故（死者458名）
1970	出炭量過去最高を記録（657万トン）
1997	三井三池炭鉱閉山（3月30日）
1998	宮原坑跡・万田坑跡が国指定重要文化財となる
2000	宮原坑跡・万田坑跡が国指定史跡となる
2009	「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」が、世界遺産国内暫定一覧表記載（宮原坑・万田坑）

3. 当時の人々の記憶

3-1. 復元地図

ヒアリング調査や文献[11]等をもとに炭鉱周辺の復元地図を作製した。復元地図は、当時の人々の生活の様子を日常利用施設、イベント、遊び場の 3 つの用途に分けて示した。尚、ヒアリング調査は現在も当該地域に住む当時の炭鉱従事者 (宮原坑、万田坑の観光ガイドの方々を含む) を対象とした[(3)]。そして、その復元地図から、浴場や商店といった生活インフラなど、炭鉱の最盛期の人々の暮らしや施設および位置を把握し、記憶が継承され得るものを抽出した。

3-1-1. 宮原坑周辺の復元地図

空中写真[(4)]等の一次資料やヒアリング調査により 1960 年代の宮原坑周辺の様子を復元地図に示した (図 2)。

当時の炭鉱従事者の話によると、住民が最も頻繁に利用していた施設は宮原販売所で、生活必需品は全てそこで購入できたため、住民の暮らしの拠点となっていたという。また、子どもたちも販売所を利用しており、天引き制度により現金を持たずに買い物を楽しんでいた。坑口付近の敷地には職員社宅があったが、それが建つ以前はその土地を使って子どもたちが遊んでいた。坑口の西側に石炭を廃棄する場所があったが、住民たちはそこに石炭を拾いに行っていた。囚人労働が行われており、移動中は囚人たちは頭に袋を被せられていたという。

臼井社宅は炭鉱に直接関わる従業員ではなく、炭鉱の発展によってできた三井系列の会社への従事者が暮らしていた。集会所では集会のほかに屋外で映画や紙芝居が行われていた。各ブロックごとに浴場が設けられており、そこで近所の人と交流する機会も多々あった。

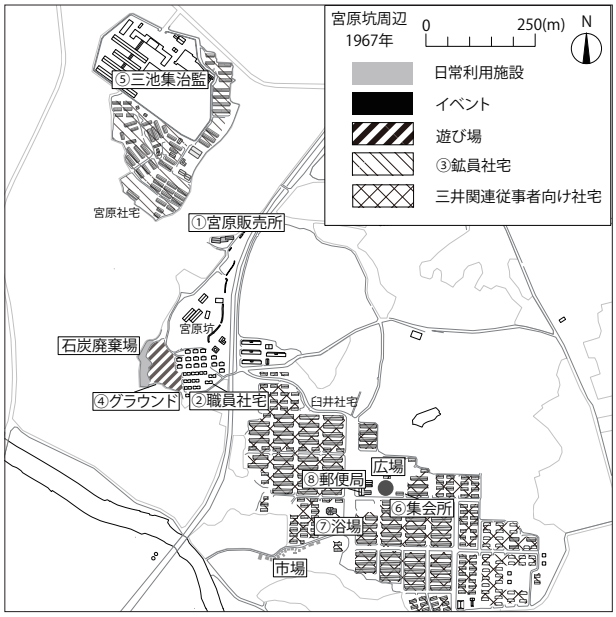

図 2　宮原坑周辺の復元地図 (基盤地図情報、参考文献[12)13)] に基き筆者作成)
※図の番号は表 2 と対応している

3-1-2. 万田坑周辺の復元地図

宮原坑周辺の復元地図と同様に 1960 年代の万田坑周辺の復元地図を作製した (図 3)。

当時の炭鉱従事者の話によると、宮原坑周辺と同様に、住民の買い物は万田販売所で行われており、生活必需品はそこで調達していたという。毎月 15 日の給料日には、この販売所付近に子どもがお菓子を買うような店が 10 件ほど並び賑わっていた。職員社宅は風呂付の住戸であったが、鉱員社宅には備え付けられておらず、土手町・仲町の住民、通町・万町の住民などにわかれて浴場を利用していた。

また、子どもたちが頻繁に遊びに行っていた施設として、池やプール、テニスコートなどが挙げられた。

プールの北側には遊園地（または動物園）と呼ばれる公園があり少し離れた社宅の住民も遊びに来ていたという。山下町の訓練所は爆発事故で被害を受けた一酸化炭素中毒者向けの復帰訓練を行っていた。訓練所が建設される以前はその場所に講堂が存在し、映画の放映をしたり、芸能人を呼んで交流会を開いたりしていた。第五中学校の花火大会の際は、宮坂町に人が集まり、そこから花火を眺めていたという。西町の酒店、商店、食品店の並びには普段から多くの住民が行き交っていた。鉱員住宅の間の広場では紙芝居などをしていたため子どもたちが集まっていた。

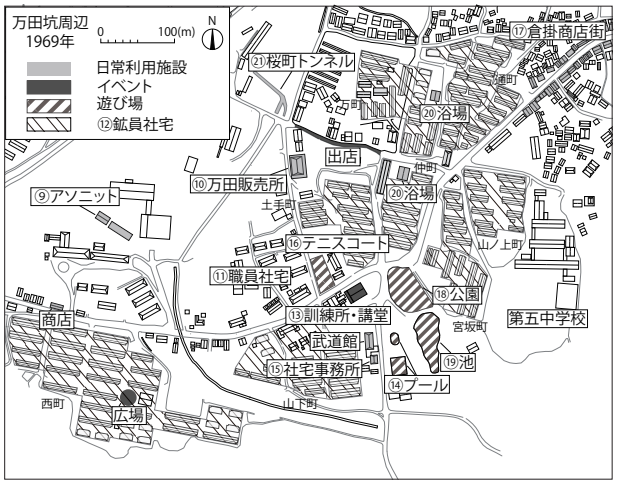

図３　万田坑周辺の復元地図（基盤地図情報、参考文献[14)15)]に基き筆者作成）
※図の番号は表２と対応している

3-2. 歴史的資産の抽出

ヒアリング調査等によって収集した炭鉱発展期の住民の暮らしに関わる施設のうち、記憶の継承の要因となり得るものを歴史的資産[16)(5)]として抽出・分析し、一部抜粋した（表2)。抽出した事物は炭鉱最盛期に利用されていたものに限定しており、全部で29件（宮原坑周辺11件、万田坑周辺18件）である。

参考文献[17)]に基づき、記憶の内容に関して、文化、居住、生活基盤に関わるものの３つに分類し、さらに詳細項目を設定した。また、抽出した歴史的資産をその形態によって建物、土地、工作物の３つに分類した。評価に関して、保存・残存状況は当時のまま形を一部でも留めているものを原型、改修等を経て現在も機能しているものを残存・改変、解体や建て替えにより跡地や新たな用途となったものを消失・土地と表記した。また記憶継承に関わる利用に関して、活動が行われていないものを利用なし、観光地化したものを観光、その他の学校や商店などの日常利用施設として利用されているものは日常利用と表記した。

表2　歴史的資産の抽出(抜粋)

	歴史的資産	記憶の内容												構成要素	評価	
		文化			居住		生活基盤							形態	保存・残存状況	記憶継承に関わる利用
		芸能	娯楽	祭祀	生活	住宅	道路	共用	水	樹木	工場	福祉	教育			
宮原坑周辺	① 宮原販売所		○		○									建物	消失・土地	利用なし
	② 職員社宅				○	○								建物	原型	観光
	③ 鉱員社宅				○	○								建物	消失・土地	利用なし
	④ グラウンド(宮原坑)		○					○						土地	原型	観光
	⑤ 三池集治監					○					○			建物	消失・土地	日常利用
	⑥ 集会所		○		○			○						建物	消失・土地	利用なし
	⑦ 浴場				○			○	○					建物	消失・土地	利用なし
	⑧ 郵便局				○			○						建物	残存・改変	利用なし
万田坑周辺	⑨ アソニット株式会社										○			建物	消失・土地	利用なし
	⑩ 三池商事万田販売所		○	○	○									建物	残存・改変	観光
	⑪ 職員社宅				○	○								建物	消失・土地	利用なし
	⑫ 鉱員社宅				○	○								建物	消失・土地	利用なし
	⑬ 訓練所・講堂	○	○		○							○	○	建物	消失・土地	利用なし
	⑭ プール		○					○						工作物	原型	利用なし
	⑮ 万田社宅事務所							○						建物	消失・土地	利用なし
	⑯ テニスコート		○					○						土地	原型	利用なし
	⑰ 倉掛商店街		○		○									建物	残存・改変	日常利用
	⑱ 万田公園		○					○	○	○				土地	残存・改変	日常利用
	⑲ 池		○					○	○					土地	原型	利用なし
	⑳ 浴場				○			○	○					建物	消失・土地	利用なし
	㉑ 桜町トンネル						○	○						工作物	原型	観光

4. 記憶の継承に関する分析

４章では、３章で作製した復元地図を用いてヒアリング調査を行い、その結果から現在の記憶の継承状況を把握し、３章で抽出された事物と比較を行う。尚、ヒアリング調査は炭鉱従事者の子世代・孫世代を対象とし、調査範囲を当該地域に限定し、20代から50代の男女28名（宮原坑周辺11名、万田坑周辺17名）の回答者を得た[(6)]（表3)。また、抽出された事物は、形態や保存状況、記憶の継承に関わる利用等の観点から比較を行うことで記憶の継承の要因となる事物についてその性質や傾向を分析する。

4-1. 現在の記憶の継承状況の整理

ヒアリング調査の結果から、３章で抽出した歴史的資産に関する認識の有無（図4）や、過去の炭鉱や人々の生活、現在も当時の様子がわかるもの、それらの情報の入手経路についての回答を得た。図４は各項目に対して、当時の様子を「知っている」と回答した人の割合を表す。

ヒアリング調査で得られた情報として、プール跡を例にとると、25mプールでは飛び込み台を使用したり、小石をプールに投げ入れ、それを誰が早く拾えるかを競ったりして遊んでいたこと、子どもの保護者たちが観客席から見守っていたこと、子どもプールでは、祭りの際、プールに板囲いをして魚釣り大会が行われていたことなどが情報として得られた。

ヒアリング調査で得られた回答を歴史的資産の分類項目にある形態、保存・残存状況、記憶継承に関わる活動の３つの題目で比較を行った（図5)。各題目で歴史的資産をそれぞれのカテゴリに分けて、宮原坑周辺と万田坑周辺のそれぞれで「知っている」と回答した人の割合を示した。

4-2. 記憶の継承の要因に関する考察

図５より、形態に関して、建物よりも跡地として残った土地のほうが継承されやすいことがわかった。これは、残存している建物が少ないことに対して、土地の

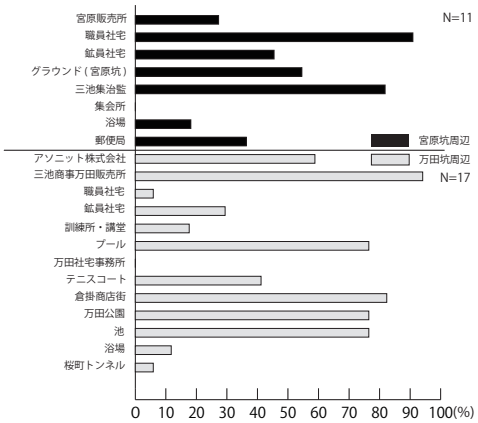

図4　歴史的資産に関する記憶の継承状況

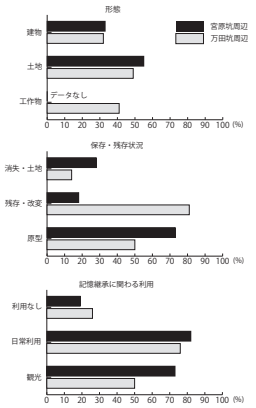

図5　分類項目ごとの記憶の継承状況の比較

表 3　子世代・孫世代へのヒアリング調査（抜粋）

過去の炭鉱や人々の生活	坑口内にあった川で遊んでいた	（宮原坑 30代女性）
	三井専用運炭鉄道跡	（宮原坑 30代男性）
	プール跡、映画館、公園、神社で遊んでいた	（万田坑 40代女性）
	三池争議後の労働者の扱い	（万田坑 50代男性）
当時の様子がわかるもの	囚人労働者が通っていた道	（宮原坑 40代男性）
	万田公園、プール跡	（万田坑 40代女性）
	山の神の記念碑、恵比寿湯、テニスコート外壁	（万田坑 40代男性）
情報の入手方法	隣人、新聞、クラウドファンディングの活動	（宮原坑 50代女性）
	炭鉱従事者だった友人の家族から	（万田坑 40代女性）
	父親、少年野球チーム所属時の監督	（万田坑 40代男性）

カテゴリに含まれる公園や池、グラウンドなどの当時の状態を維持していたものが多くあったことが影響している。

保存・残存状況に関して、2 つの対象地の平均をとると、消失・土地型と比較して残存・改変型と原型型のほうが高い割合で継承されている。万田坑周辺において原型型よりも残存・改変型のほうが割合が高かったのは、プール跡やテニスコート跡のような原型を留めているが利用されなくなったものよりも、商店街や公園、学校など現在も日常的に利用される機会の多い残存・改変型のほうが人々の身近にあり、認識されていたからである。また、プール跡やテニスコート跡は、商店街や学校と比較して現在の住宅街から少し離れた場所にあるため、ヒアリング対象者の活動範囲も影響している可能性がある。

記憶継承に関わる利用に関して、ヒアリング調査の対象地が炭鉱周辺に限られていたため、地元の人々に親しみの深い日常利用施設のほうが観光よりも記憶に残るという結果となった。

また、ヒアリング調査の過去の炭鉱に関する情報の入手方法についてという質問項目では、28 名のうち 10 名が炭鉱に従事していた家族から聞いたと回答し、その他にも知人や友人から聞いたという回答が複数得られた（表 3）。一方で、同質問項目に対して、炭鉱での爆発事故などのマイナスのイメージを持った記憶に関しては、当時の炭鉱従事者が話そうとしなかったという回答が得られた。

以上のことから、形として残った施設が記憶の継承の要因となる可能性が高く、その中でも現在まで日常的に利用されている施設が記憶の継承の要因となりやすいことがわかった。一方で、炭鉱での爆破事故など、マイナスのイメージを持った記憶は意図的に継承されにくい可能性があることを確認した。そして記憶の継承の主な要因は家族や知人から共有されることが多いことが明らかとなった。

5. 研究の総括

炭鉱最盛期から現在まで形や様式を変えながらも物的情報として残存した施設や現在も日常的に利用されている施設は、記憶として継承されやすい傾向にある。建物などの物的情報以外に子どもの遊び場であった跡地は記憶として継承されやすいということ、炭鉱従事者との接触が記憶の継承の発端となることがわかった。

今後の課題として、物的・非物的情報や日常・非日常利用を一体的に判断すること、書籍等の文字による記憶の継承に関して分析する必要があることなどが挙げられる。

謝辞

本研究にご協力いただいた宮原地区の方々、万田地区の方々、万田坑ステーション観光ガイドの方々、宮原坑観光ガイドの方々に厚く感謝を申し上げます。

脚注

(1) 本研究では、人々が共有する記憶がその時代を経験していない若い世代に共有されることを記憶の継承とする。
(2),(5) 記憶の継承に活用できる可能性のある物的空間的存在 [参考文献 6) を参照]
(3)2020 年 10 月 10,25 日実施
(4) 宮原坑周辺 1967 年 , 万田坑周辺 1969 年
(6)2020 年 11 月 14,15 日実施

参考文献

1) 林延玖 , 後藤春彦 , 山村崇 (2017)「近代化産業遺産の集合的保存における『認定外遺産要素』の位置づけと価値 - 足尾銅山関連遺産を代表事例として -」公益社団法人 , 日本都市計画学会 , 都市計画論文集 ,Vol.52,No.3
2) 槻橋修 , 山田恭平 , 中村秋香 , 平尾盛史 (2014)「被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究 岩手県大槌町町方地区における復元模型ワークショップ」日本建築学会計画系論文集 , 第 79 巻 , 第 699 号 ,1129-1137
3) 大島卓 , 鈴木雅和 , 濱定史 (2012)「福島県岩瀬牧場の近代化産業遺産としての再評価」ランドスケープ研究 ,2012 年 ,75 巻 ,5 号 ,p147-552
4) 西牟田真希 (2010)「三池炭鉱における社宅コミュニティ」社会情報 / 札幌学院大学社会情報学部編 ,Vol.19,No.2
5) 森嶋俊行 (2011)「旧鉱工業都市における近代化産業遺産の保存活用過程 - 大牟田・荒尾地域を事例として -」地理学評論 ,88-4,305-323
6),16),17) 清水肇 , 中村友美 (2018)「地域の記憶継承のための歴史的資産のあり方の検討　戦後の強制移転を経た沖縄県読谷村 K 集落での取り組みから」公益社団法人 , 日本都市計画学会 , 都市計画論文集 ,Vol.53,No.3
7),9),10) 大牟田の近代化産業遺産ホームページ；年表 <https://www.miike-coalmines.jp/chronology.html>（最終閲覧 :2020 年 11 月 14 日）
8) 三井三池炭鉱炭鉱社宅マップ；三井三池炭鉱社宅所在図 , 三井鉱山宮原社宅 , 三井鉱山臼井社宅 , 三井鉱山炭鉱万田坑周辺図 <http://www.miike-coalmine.org/shataku/shatakumap.html>(最終閲覧 ;2020 年 11 月 11 日)
11) 三池炭鉱掘り出し隊 (2013)「三池炭鉱写真集 - 万田坑聞き書き -(改訂版)」特定非営利活動法人
12),14) 菊地成朋 , 牛島朗 , 天満類子 , 小林悠介 , 中村翔悟 , 田中翔大 (2009)「松原炭鉱住宅と夕陽ケ丘住宅　筑豊の大炭鉱・三井田川鉱業所が建設した住まい」福岡県
13)『ゼンリンの住宅地図　大牟田　1964・1965 頃』（ゼンリン；1964・1965 年 ）
15)『ゼンリンの住宅地図　荒尾市長洲町　1952 年』（ゼンリン；1952 年 ）